

# 教育科学研究会通信

京都教科研例会案内 367 号

9 月号

豊岡駅から



日時 2023 年 9 月 16 日 (土) pm6 時 30 分～ (日程変更注意)

場所 乙訓教育会館

内容 第 350 回 9 月京都教科例会

提起

2000 年以降の教育政策と社会を問う

—教育 9 月号第 1 特集を読む—

提起 大西 真樹男 (事務局)

現場を無視した教育政策がやつぎばやに行われてきました。振り回されているのはまちがいなく現場の教職員、子ども、保護者です。特集 1 からじっくり考えたいと思います。オンライン参加ご希望の方は事務局までおしらせください。URL 送信します。みなさんの参加をおまちしています。

## 367 号目次

1, 9 月例会案内		1
2, 8 月例会報告		3
3, 連載 (12)	渡部 太郎	5
4, 私の研究ノート (29)	佐藤 年明	6
5, 編集後記・ニュース		9

## 京都教育科学研究会第348回8月例会の報告

はじめに

8月例会はこの夏の体験交流でした。夏の全国大会報告のみならず、旅行や見聞されたこと、読書体験など自由に語っていただきました。暑いですので水分補給をしながら、リラックスしたオンライン研究会になりました。

### 連絡・協議事項

9月例会(9/16)	教育政策	提起	大西
10月例会(10/21)	大学の学び	提起	井上 佐藤さん
		ゲスト	岸本清明さん(兵庫)
11月例会(11/25)	公立のありかた	提起	渡部
12月例会(12/16)	懇親会		

提起

参加者による夏の体験交流  
—とっておきの夏の体験発表?—

### 例会報告

※いつものように録音おこしではありません。吉益の記録メモです。ご容赦を。

井上: 夏休み前半は勤労者山岳連盟に参加 西穂高 奥穂高 最高齢参加でした。それから中国視察(旅行)悪いイメージがある中で最新の中国を観たいと思った。高速鉄道で移動加害の実態をしる。日本の建物が残っている。731, 918もナショナリズムをあおってない。博物館。論文、資料の提示 厳格に示している。中国の人、親切に対応してくれる。ハルピン、ごみひとつ落ちてない。乗車マナー徹底している。日中関係 庶民とのずれ 一度も日本人に合わない。政治の責任。現代中国を知る。地下鉄 便利、綺麗 スマホですべて決済でした。自分の目で中国を確かめられました。

寺井: 教科研の大会 言葉と教育 現地参加 報告することになった。80歳にして授業報告。古文の報告。大会前 大変でした。滋賀大会から現地世話人に。神奈川大会, 志摩さんが中心、分科会の方向性がようやく確立してきた。英語と国語は共通の問題で論議できないものか。田中さんと九野里さんと3人で報告。参加者の問題意識との若干のずれがあったような、深めるという点で分科会運営の難しさを感じました。

佐藤 (佐藤さんは第61回教育科学研究科全国大会(不)参加記というA4,6枚のレジメを提示され、オンラインと対面を兼ねるハイブリット開催の難しさについて語られました。)今後オンライン参加はさげられないが、機械の向上、設備の確立がないとどうしても不測の事態が生じるのではないか。基本 対面参加を軸にしてはどうか。申し込んだが、音声など不良で退出した。教育課程分科会の資料は入手した。教育課程の問題は困難な事態になってきていると実感しました。

河内: 生活綴方 ヴィゴツキーの研究を続けています。三重の夏は 草引きの毎日、夏とのたたかいです。学会発表の予定です。日本教育方法学会で 石田和男について発表します。意欲 気力 体力の問題を感じています。参加の意義をかみしめています。

吉益: 能力・発達・学習の分科会に参加。いままでの合同分科会から基本にもどった。3つの報告  
前田晶子報告 「坂元忠芳の人格発達論の検討」  
池添梨花報告報告 「小学校5年生の算数での子どもの学びと成長「単位あたり量」  
河野伸枝報告 「学童保育で育ちあう子どもと親、指導員」  
じっくり論議できました。

夏は大学のスクーリングがいくつかあり、名古屋や豊岡にいきました。美味しいものが食べられるのが楽しみのひとつです。受講生のほとんどの方が女性です。通信教育にひたむきに参加される姿にふれエネルギーをもらいました。

寺井: 現地に行くまでが大変だった。対面が基本だが 分科会 と報告者一体となるのはむしろかしいと改めて感じた。

井上: 昨年、日本社会教育学会 オンラインで気楽に参加 かつ深まった。教科研に対してやや問題意識が遠くなってきた。興味のある所に参加する。間口をしぼっている。理論的なものを教科研で学びたい。「教育」が実践記録が中心になっている。それはいいのだが、やや物足りない感じがしている。この例会は無理なくぼちぼちと続けていきたい。

佐藤: 教科研はひとつのサークル。学会は個人研究発表 だから、オンラインでうまくいく。京都教科研は人と人とのつながりを大事にしていけばいいのではないか。全国に読む会はあるが

〇〇教科研と名乗っているところは少ない。それだけ京都教科研、関西教科研の存在意義が強いと思う。アットホームな感じを大事にしつつ今の雰囲気継続してほしい。

**寺井:**部会のありかた模索しています。。 60代未満の方とふれあう機会がない。60代 問題意識深い。その方たちとの両方の交流がいると思う。京都教科研は限られた時間にくつろいだ感じがもっているのがいい。

**佐藤:**研究方針についての論議もできたら深めてほしい。 全国組織との関連はどうか。教科研は個人の集まりだが、ある意味、京都からの発信も大事にしてほしい。

**河内:**理論を深く学ぶ 教科研の意義 育てていく。以前 現場で研修会を大切にしていた。 情勢をどうみるかにかかわってくるのではないかと。核がいるのではと思う。こうしてオンラインで参加でき大変ありがたい。

**井上:**HP の容量がふえている あらたな改善策を模索しています。

※夏の近況報告とあわせ、これからの京都教科研の方向などがざっくばらんに語られ楽しいひとときでした。本日は不参加になりましたが、大西さんの西穂登山記(次号通信紹介)山田さんのアウシュビッツ見学はまた別の機会に紹介させていただきます。

※事務局や例会で何度も意見交流していますが、京都教科研も世代交代が当然あり、問題意識が年齢とともに変化していきます。今までのスタイルを大事にして、無理なくみんなの声を発信できたらと思います。基本は渡部会長の意向を大事にしながらかの方向を模索していけばと考えています。新しく来られる方をいつでも歓迎し、さらされる方の気持ちも尊重し、人と人とのつながりをいつも大事にしたいと思います。分科会世話人を担当している方々はそれぞれのポジションで発信され京都の例会にも反映される予定です。

## 連載 12 卒業生のサポート

渡部太郎

私は現在、聾学校の中学部で実践をしています。以前は高等部でも実践をしていました。そのときに担任をした生徒たちは卒業して、大学や他府県の聴覚支援学校の専攻科や、専門学校に進学したり、企業に就労したりしています。中には、進学先でつまずいてしまって退学したり、会社を辞めてしまったりする人もいます。そういった卒業生たちは、よく聾学校に遊びに来ることが多いです。悩み、困ったことがあっても、卒業後は手話を使って誰かと話すこと機会が少なくなるからだと思います。卒業の際には、仕事や生活で困ったときに相談できるように福祉関係の相談機関と関係を作ってはいるのですが、やはり手話というコミュニケーション手段がスムーズに使えず、相談したくても足が遠のいてしまい、学校にやってくるというケースが多いです。その中で、1つのケースを紹介したいと思います。

Kくんは、高等部を卒業して、某自動車整備の企業へ就労しました。いろいろと大変なこともあり、「辞めたい」と口にすることもありながら、今も毎日がんばって働いています。コロナの時期は、みんなマスクをしていたので、口形を見ることができず、ずいぶんコミュニケーションに苦勞をしていました。聴覚活用はしつつも、相手の口の形を見て、読み取ることが多いので、聴覚に障害のある人々はコロナ禍では本当に苦勞されています。その彼があるとき学校に相談に来ました。母親が体調を崩し、その介護もあり生活が苦しいとのことでした。話の中で、彼が障害年金を受け取っていないことがわかりました。彼も自分で役所に行っているのですが、書類の作成や手続きはとても難しく自分で行うのは厳しい様子でした。彼も私も仕事をしていて、在学中ならまだしも、時間を合わせることもできず、書類の書き方を教えたり添削したりすることは不可能でした。そこで、中学部の先生に手話ができる社労士さんを知っている方がいて、その先生から紹介してもらい、Kくんと繋げて、申請へと進めることができるようになりました。1年以上の月日をかけながらも、無事に障害年金を受け取ることができるようになったと、本人から報告をもらうことができました。

生徒の卒業後の自立に向けて、在学中に指導をして、行政や福祉とつなげることが大切だと思います。しかし、現実にはいろいろ難しいこともあって、関係機関を自分でスムーズに利用しにくい現状もいくつかあります。卒業生にとってやはり一番頼ることができ、相談しやすい場が学校なのです。教師の多忙化が言われる中で、卒業生のケアまですると本当にたいへんです。しかし、卒業生の顔を見ると、こちらもうれしくてエネルギーが出てきます。そのためにも、短い期間で異動してしまうのではなく、一定長くその学校に居続ける先生も必要だろうと思います。安心して、懐かしく、いざというときに頼ることのできるそういった学校という機関の重要性を感じます。

次回は大西さんです。

**勝田守一『能力と発達と学習—教育学入門 I』(1964)**

【1 回目】 佐藤 年明

1 ヶ月のお休みをいただきました。連載を再開させていただきます。私の連載中でも何度か予告していた勝田守一先生の古典的文献によやく取りかかります。何回で締めくくられるかまだわからないので、【〇回中の〇回目】とは書けません。

実はこれまでの 28 回で取り上げた坂元忠芳『情動と感情の教育学』、神代健彦編『民主主義の育てかた』、吉益敏文「生活綴方を実践する教師の『まじめさ』に関する考察」については、私の「佐藤年明私設教育課程論研究室のブログ」に「教育学文献学習ノート」シリーズとして字数無制限で書いたものを再構成して、本連載の原稿をつくっていました。そして勝田『能力と発達と学習—教育学入門 I』についても、上記シリーズに加えるつもりで 2021. 6. 11 から原文抜粋とコメント作成の作業を開始しました。その作業は他の文献の検討を優先する必要から 2021. 8. 29 で一旦中断し、2023. 5. 16 に再開しました。

最初にノート化作業を始めたときから、これが完成したら改めて再構成して本連載に加えたいと考えていました。しかし今年ノート化を再開してみて、文献の量が膨大でこの作業自体いつ完了するかわからないし、いったんノート化(抜粋とコメント付記)できたとして、それをいくら大々的に再構成したとしても、きっと本連載の何十回分にもわたってしまう量になるのではないかと思えてきました。それで、勝田『能力と発達と学習』の全体を一応過不足なく紹介しながら自分のコメントも書くという方針を断念し、佐藤個人の関心に限定した特殊な書き方(まあ、これまでもそういう書き方だったと言われれば、そうなんです^;)で書くこと、また書き下ろしは「佐藤年明私設教育課程論研究室のブログ」掲載の「教育学文献学習ノート」で、という従来のやり方を変更して、最初から本連載用に原稿を作成することにしました。

「佐藤個人の関心に限定した特殊な書き方」というのは、連載読者の皆様に「そんなどうでもいいやん」と思われてしまったらそれまでなんですが、本書を私が京都大学教育学部の卒業論文の中で取りあげた、という自分個人の原点に立ち戻って読み直してみる、ということです。

47 年前の 1976 年冬に卒業論文に取り組んでいた時に、勝田先生の『能力と発達と学習—教育学入門 I』にうんとお世話になりました。しかし、その後も座右において時々繙いてはみたものの、この 40 数年間改めてきちんと学び直す機会がありませんでした。それで、60 代もあと残りわずかというこの時期に改めて読み直し、学び直すことにしました。

全 7 巻の勝田著作集を、大学 4 年生だった 1976 年 8 月に学部の先輩から全巻一括で廉価で譲り受けました。第 6 巻「人間の科学としての教育学」に、卒業論文第 2 章をほぼそれに依拠して書いた『能力と発達と学習—教育学入門 I』が収録されています。当時著作集の

目次ページに残っていたメモによると、同書を私は卒論執筆終盤の 1976. 12. 17-19 に通読しました。3日で読んだわけです。自分が卒論で考えまとめようとしていることにこれほどマッチする著作はないと半ば有頂天になって読みました。ところが、読み終えてそれを自分の頭脳を通して構成し直して論文原稿にしようとして、全く筆が進まないことに愕然としたのをよく覚えています。わかったつもりで読んでもそれを簡単に他者には説明できないだけの深みを同書は備えていたわけです。それでもなんとか 1977. 1. 17 の締切までに論文を提出しました。子どもの社会認識の形成過程について研究しようとしていた私は、勝田の認識について、認識の発達についての深い考察に大いに学び、救われました。

勝田守一著作集第6巻『人間の科学としての教育学』に収録された『能力と発達と学習—教育学入門Ⅰ』（『教育』に1962年1月号より連載 初刊 国土社 1964）の構成は、以下の通りです。

### 能力と発達と学習—教育学入門Ⅰ

#### まえがき

#### 序章 未来にかかわる時点で

#### 第一章 人間の能力をどうとらえるか

- (一) 能力と知能
- (二) 知能をなぜはかろうとするのか
- (三) 知能の高低は生まれつきか
- (四) 能力に対する社会的刺激
- (五) 能力の定義
- (六) 能力の諸因子
- (七) 能力観の歴史的展望
- (八) 学力とはなにか

#### 第二章 人間が成長するとはどういうことか

- (一) 発達という視点
- (二) 言語と思考
- (三) 言語と子どもの発達
- (四) ヴィゴツキーとピアジェ(1)
- (五) ヴィゴツキーとピアジェ(2)
- (六) 発達と学習
- (七) 発達と教育
- (八) 状況的思考と言語的思考
- (九) 思考の社会化
- (十) 発達のまわり道
- (十一) 思考の二つの類型
- (十二) 社会生活と発達

#### 第三章 人間の学習を指導する条件はなにか

- (一) 学習の定義
- (二) 学習と教育
- (三) 教育の条件
- (四) 人間への成長
- (五) 行動の言語化
- (六) なにを教えるか
- (七) 教育と経験
- (八) 文字記号と科学的認識
- (九) 科学の諸類型
- (十) 科学学習と人間の発達
- (十一) 労働経験と文字記号の結合
- (十二) 科学への要求

#### 第四章 能力の発達と人間的価値の実現

- (一) 国民的教養
- (二) 教養と教育実践
- (三) 現代と教養
- (四) 職業と労働
- (五) 職業訓練と人間形成
- (六) 労働と人間的発達
- (七) 全面発達と教養概念
- (八) 無限の可能性
- (九) 労働と文化

(十) 能力の人的基底  
歩と人間の発達

(十一) 学習の基礎

(十二) 社会の進

卒論以来47年ぶりに勝田先生の著作とどう再対面するか考えたあげく、私の卒業論文「社会科教育における児童の認識形成過程についての検討」(本文400字×44ページ 50ページが上限という規定)の中で勝田から集中的に学んで書いた第二章第一節を全文再録しながら、「学び直し」をすることにしました。そんな作業に読者のみなさんを付き合わせることは不遜ではないかという思いはあるのですが、この連載の開始当初からの「自分にとっての〇〇」という私の研究カラーからは到底脱却できませんので、これで行かせていただきます。お付き合い下さい。

私が卒論を書いた1970年代には論文原稿はまだ手書きで、いま私の手元には提出した手書き原稿(提出前の最終盤に先輩院生達の懇切丁寧な指導(^\_^;)が入り、私自身は提出ギリギリまで素稿を手直しし、清書は先輩後輩たちに頼むという、現在ではあり得ない「仕上げ」方をしたシロモノです。たしか7人くらいの筆跡で書かれていると思います(^\_^;)のコピーしか残っていません。卒論自体を社会的に公刊するというのは、戦前あたりのとてつもない大学者にしかなせないわざでしょう(中内敏夫先生が自らの卒論・修論をベースにして出された『学力の社会科学』2009については、いつかきちんと読みたいと思いつつ果たせていません)。私自身は決してそんな大それたつもりはないのですが、このままではやがて紙切れとして埋もれてしまうしかない若い頃の未熟な研究の産物をどこかに残したいという気持ちがあり、いずれ卒論全編を私のブログのアーカイブに掲載するつもりで「写し」作業を行なっています。ここでは卒論の構成を紹介した上で、連載次回に論文本文を第二章第一節に限って再録させていただきます。

佐藤年明卒業論文「社会科教育における児童の認識形成過程についての検討」(1977.1.20提出)

はじめに

第一章 教科研における社会認識研究の経過

第二章 児童における社会認識の発達と学校教育の役割

第一節 認識の能力とその発達

第二節 学校教育における社会認識の指導

第三章 社会事象に対する科学的認識の形成過程 — 教科研社会科系統試案の編成原理の検討

第一節 教科研社会科系統試案の概要

第一項 科学的概念形成の準備期

第二項 科学的概念の系統的教授—学習

第二節 「系統試案」における認識主体と認識対象の関係

おわりに

(つづく)



## 読書・映画・DVD・CD情報（趣味的ですいません）

### ① 東洋的な見方 鈴木大拙 角川ソフィア文庫

前回の例会で野中代表から鈴木大拙の禅の思想について紹介されました。東洋と西洋の違いについて語りは平易なのだが難解でした。互いに補完しあうことで思想が深まるのが東洋的。納得と疑問が交錯した。

### ② 保健室から創る希望 福井雅英 山形志保 新日本出版

養護教諭の山形さんと研究者の福井さんの往復書簡のような教育物語。対人援助職の立ち位置、子ども理解について深く考えさせられる。

### ③ なぜ豊岡は世界に注目されるのか 中貝宗治 集英社新書

城崎温泉を含め、文化芸術の街、コウノトリの街としてしられる豊岡市の魅力を元豊岡市長が縦横に語る

### ○ 君たちはどう生きるか 宮崎駿監督 2023映画

宣伝いっさいなしのジブリ映画。観た人によって賛否両論の意見がある。負い目をせおい、悪や負の感情を見据えながら生きるとはに迫る作品と感じた。今回は、いつもの少女でなく少年が主人公。見ごたえがあった。

## 編集後記・よもやま話

※367号は参加者による夏休み交流。3年ぶりの対面集会となった自由の森学園での大会報告が中心になったが山登り海外旅行、学会発表など多彩な報告を聞き合いました。京都教科研のこれからについても意見交換ができて有意義な時間でした。

※佐藤連載が勝田守一研究で再開されました。リレー連載は渡部代表の現場からのリアルな発信。リレー連載は事務局にかぎらず書き手を広げていく予定です。

※セミの声がかわり秋の虫の声がきこえても暑さが厳しい日々。健康管理が大変です。でも自然は少しずつ変化しているし植物や動物はたくましく生きています。その知恵に学ばねばと思います。引き続きお身体 ご自愛を。

※阪神タイガース、いつのまにかあれに向けてマジック点滅。気はぬけないが傑出した投手や打者がいないのにこの状況があるのは、やはり監督やベンチの采配の妙かな？と思います。ズッコケても慌てず騒がずです。